

Jyosho

BUKKYO
UNIVERSITY
LIBRARY
INFORMATION
BULLETIN



佛教大学図書館

後

記

◆平成13年10月11日、本学を会場にして開催された第6回仏教図書館協会研修会の講演のまとめを京都大学人文科学研究所梶浦先生、本学文学部松永先生に執筆をお願いし掲載した。

◆平成13年度図書館委員会は活発に活動した。貸出制度の見直しもその一つである。概要を表にまとめ掲載した。掲載はしていないが新しい佛教大学取書基準の策定も行われたので図書館ホームページに追加を行った。

<利用案内>から

<http://library.bukkyo-u.ac.jp/lib/critNDC.html>

◆本誌「常照」については、48号から下記のアドレスでも読めるようにした。ご利用いただければ幸いです。(崎)

<http://library.bukkyo-u.ac.jp/lib/critNDC.html>

常照

常 照 —— 佛教大学図書館報

平成14年3月31日 発行

編集・発行 佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL 075 (491) 2141

FAX 075 (493) 9042

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib>

Jyosho

51
SPRING
2002

BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib>

ISSN 0388-6700

常照

佛教大学図書館報

CONTENTS

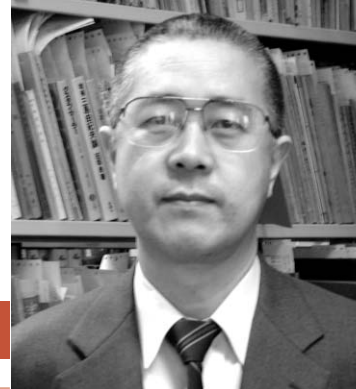
日本近世の大蔵経出版について	2
近代における大蔵経の編纂	10
貸出制度等の変更について	20
サイト紹介	22
開館時間表	23

佛教大学図書館蔵品紹介

第十四代那摩尊者六用不行入定岩谷心加死成形祀橋本神社萬物皆巖骨肉鐵琴誦鳴

日本近世の 大蔵経出版について

松永 知海



「経に曰く、仏は大医王のごとく、法は甘露の妙薬の如く、僧は看病人の如く、衆生は重病をうけたる人の如しと。たとへば世の中の病をうけたる人、もし看病人ありとも、くすしなくんばやまひいえがたく、たとひ薬師ありとも、薬なくんば、また何を以てか、くすせんや。此故にくすしと薬と看病人とは、この中一をかくべからず。しかるに此国もとより、仏あり、僧あれども、法薬いまだ全からず。衆生のやまひ、なんすれぞいせん。」

これは、日本ではじめて整版による流布版の大蔵経をつくった黄檗僧鉄眼の言葉である。日本にお経がないわけではない。奈良朝における国家がなした一切経の書写事業をはじめ諸寺院には書写された一切経がある。鉄眼が大蔵経を出版する30年程前には日本初の出版である天海版一切経の刊行も行われた。それでもあえて鉄眼は「法薬いまだ全からず」といいきる。その意味するところは、日本において法薬としての大蔵経は十分にみだされていなく、という歎きであろう。彼ははじめ中国からの大蔵経の輸入を考えたが、後に大蔵経の出版を決意する。「人は法をよりどころにし、法はそれを信じる人を得て弘まる」という言葉がある。正しい法を弘め、後世に伝えていく事にはいろいろな方法があるとはいえ、日本における大蔵経の出版の完成は質においても、量においてもその到達点の第一といってもよいであろう。その経緯を概観したい。



一 近世の大蔵経

近世になって、大蔵経(一切経)の印刷をはじめた僧が現れた。宗存がそれである。彼は朝鮮の高麗版を底本に經典の出版をはじめた。大正天皇の御即位を記念してはじめられた京都大蔵会においてその存在が知られ、第6回大蔵会で出版に際しての「勸進状」が展示されてその出版が確認された。昭和35年齋藤彦松という人は比叡山延暦寺慈眼堂の土蔵にあった木活字をこの宗存版の木活字だと発表した。実は慈眼堂は天海僧正をお祀りしている御堂である。そこでそれまで慈眼堂にあるのは天海版の木活字だといわれていたものであった。滋賀県の教育委員会の調査がはじまり平成7年から文化庁の文化財調査の結果、これは宗存版の木活字約17万個であると認められ、平成12年12月20日に国の重要文化財に指定された。

その天台沙門聖乗坊宗存は伊勢高日山常明寺の住僧であって、慶長18年(1613)正月に伊勢神宮内院常明寺に摺印一切経の奉納を発願し、京都北野経王堂においてその事業に着手した。このことは願文や『一切経開版勸進状』からわかるが、彼の伝記はもちろん生卒年すら分かっていない。慶長19年9月には建仁寺の高麗版大蔵経によって『大蔵目録』

3帖を出版予定の目録として刊行し、これに発願文をおさめた。その奥書に、

戊申年高麗国大蔵都監奉勅彫造一代蔵経、開梓摺写報仏恩徳、結縁衆生同証、仏果二世安楽、乃至法界平等利益。大本願伊勢聖乗坊宗存(花押)慶長十八癸丑年九月吉日於洛陽梓之。当施主開版 吉野入道意齋西田勝兵衛尉(戊申高麗高宗35年(1248)(第6回大蔵会)展覧目録大正9年11月)

とあって、慶長18年(1613)にまず『麗蔵』の目録を和刻にして出版した事がわかる。この開版の施主西田勝兵衛は寛永(1624-1644)から寛文年間(1661-1673)まで京都寺町二条下ル妙満寺前にあった書肆であり、常明寺については『伊勢参宮名所図会』(寛政9年刊行1797)に、つぎのようになっている。

常明寺、高日山法樂院といふ。間の山より北にあり。当所第三の大寺なり。本尊薬師にて天台宗、額は後陽成院御宸翰、本堂並山門等巍巍たり。聖徳太子の建立ともいふ。按るに此地尾部陵の所に方角相応して、いにしへ尾上寺又は泉寺又天福寺などいひしも此寺の事なり。尾部坂にあるより尾上寺といふ。あか井の清水ありしより

泉寺の名あり。其後廃せしを再興して天福寺といひしは是天福年中再興の故なり。今は檢垣家常明再建せしより常明寺といへり。版式は、1行14字詰め22行、ないし1行17字23行で、はじめの糊しろのところに経論名、巻数、枚数、千字番号を細字で刊記し、巻末に、「(甲寅など干支)〇〇歳大日本国大蔵都監奉勅彫造」と刊記がある。

これは高麗再雕本の形式に倣うもので、違う処は整版でなく、文禄慶長の役によって朝鮮から伝来した新しい技術の木活字を用い、折帖に装幀した点である。慶長末から元和をへて寛永のはじめに至る前後十余年にわたる出版であるが、元和4年(1618)以降の刊記には「奉勅彫造」の文字がみえなくなり、刊行の仏典の種類も大蔵経から天台宗の章疏や一般書に変わっていく。当時は後水尾天皇の御代であるが、後陽成上皇の在世であった。上皇は元和3年(1617)8月26日、47歳で崩御となった。このことが刊記から「奉勅彫造」の文字が消える理由であろうといわれ、現在140部が現存している。最後は寛永元年(1624)11月10日の『法苑珠林』巻81である。以後の出版がない理由は不明であるが宗存が示寂したためであろうと考えられている。その宗存版を天海が所持していたことが明かとなっている。

小山正文氏は『法華玄義科文』(龍谷大学所蔵)巻一之一見返しに「前大僧天海寄進」墨書や蓬左文庫所蔵5点9帖の宗存版が尾張徳川家義直(1600-50)の蔵書であったことを示す「御本」印が押されているが、元来そ

れは父家康旧蔵のいわゆる「駿河御讓本」であったらしいと推定し、ここに宗存一天海一徳川家の関係も考えられて興味深いものがある、と述べている。

山科の毘沙門堂経蔵調査でこれを裏付ける宗存版が見つかった。毘沙門堂はもともと出雲寺とよばれ左京京極出雲路にあり毘沙門天がまつられ、人々の信仰を集めていた。それが近世になって廃絶していたのを慶長年間末に後陽成院から天海へ毘沙門堂の号を賜わり、寺を再興することを命じられた御寺である。天海(寛永20/1643没)が亡くなるに及んで法嗣の公海は將軍家綱の援助を得て、寛文5年(1665)山科の現在地に寺領を賜わり、堂宇を整えた。この経蔵は寺伝によると天和2年(1682)に完成したが、そこには天海版大蔵経が290の函に納められている。1函に2帙乃至3帙が納められており、その帙の芯紙に宗存版が使われていた。表紙となっている茶色の厚手の紙には天海版の試し摺りに使われたと思われる紙が使われていた。最初見た時は同類の試し摺りかと思ったが、肉太の書体であり違和感を覚えていたが、刊記の部分を見るにおよんで、それらが宗存版である事が判った。そこにはいままでには知られていない

七仏八菩薩所説神呪経 元和七年
過去現在因果経
大吉義神呪経

図版-1

などの經典が使われていた。また、更に驚くべきことは、「東叡山」の墨書や「東叡山日記」(慈眼大師全集下)を補うものと思われる墨書がその帙の芯紙に使われていた。

天海版大蔵経が完成してから、毘沙門堂の経蔵ができるまでは33年ほど経過しているわけだが、これらのことから初期に摺られた天海版の大蔵経であることがわかる。宗存と天海は同じ天台沙門としての交流の有無は別として、天海がかなり宗存の大蔵経刊行の事業を意識していたことは理解できる。

二 天海版の完成

日本で最初に大蔵経の出版を完成させたのは天台宗の天海である。大変に長命で108歳で亡くなられたと一説には伝えられている。出版の最中、寛永20年(1643)に亡くなっている。寛永14年(1637)にはじまり12年を費やして慶安元年(1648)に出来上がった。木活字を用いて1紙24行4折の折本仕立、1面6行、1行

17字を基本としている。木活字は木片1個に1字を刻み、部首別に分類整理しておく、底本となる經典に基づき1字1字集字して、それらを1枚の板のようにするために隙間を埋める材を用いて締めつけて摺りあげる。この方法だと初めに何部印刷するのかを決めていけば、校正も簡単で、版木を堆積積み上げる置き場

所にも困らない。木活字を分類収納する箱のスペースで済んでしまう。現在上野の寛永寺にはその木活字を含め約28万個が残されている。短所は一度摺りあげてしまうと、解版してしまうためあとから摺り増ししたい時は、もう一度組版仕直さなければならぬことである。

目録の上から宋版に基づいているといわれ、底本は川越喜多院の蔵本を使い、茨城県最勝王寺の宋版を校合に使ったといわれている。なお、喜多院の蔵本は宋版思溪版を主とし元普寧寺版もはいた混合蔵である。摺本からみると、明の万曆版も一部に使われている。

さて慶安元年に出版された天海版一切経最後の「最」箱にある「日本武州江戸東叡山寛永寺天海版一切経新刊印行目録」全五巻とそれを翻刻した「昭和法寶目録」所収の目録が一般によく引用されているが、共に誤りがある。1,453部6,323巻665函としているが正しくは目録を含め1,454部5,781巻である。ただし般若心経などの同巻の経典もそれぞれ1巻と数えると6,323巻となる。また、経典の順序や経典名なども目録と摺られた経典とは相違する。

経典をみると、活字を組む「うへて」と呼ばれる植字者の名前が紙継ぎ部分の左右の端に小さい活字で摺られている。また表紙の内側に「久兵衛折」「折手長三郎」などの名前もまま見える。函数665というのは必ずしも厳密な規格があったわけではない。山科毘沙門堂の函数は290の函に納められており、青蓮院と叡山文庫所蔵の天海版はともに665函であるが、函内の経典は少しずれており、一致していない。

また、白紙の部分、言い換えると活字が印刷されていない部分が2箇所ある。それは40巻本『華嚴經』の第19巻第10紙と『仏説七俱胝仏母准提大明陀羅尼經』第1巻第11紙とである。いずれも、底本となった本に落丁などの問題があり活字を組めなかったことが予想される。さらに本文のなか、1字もしくは複数文字印刷されていない箇所がある。

- ①『摩訶僧祇律』第27巻第21紙3行目第2字3字「布薩」の欠字
- ②『舍利弗問經』第8巻第17紙5行目第7字8字の2字空白。
- ③『阿毘達磨大毘婆沙論』第19巻第17紙6行目、第1字より第7字の「異熟問若異類而」の欠字
- ④『阿毘達磨大毘婆沙論』第114巻2紙6行目第5字6字の2字「云何」の欠字
- ⑤『仏本行集經』第18巻第5紙24行目第3字の「我」の欠字

などである。これらの箇所も底本の虫食いや版木の欠けによる欠字などが予想され、底本特定の手がかりとなる箇所である。

印刷部数については、現存の部数から推定すると、多くとも30部程と考えられる。もともと、天海版の出版意図は『徳川実紀』に(『大猷院殿御実紀』<新訂増補国史大系第40巻>538頁上下)

これは 御神いまだ世にましませし時、慈眼大師の願により、東叡山にて開版命ぜられたる一切経、此ごろ全部剞劂の功をなしければ、五百余函を神前の西方に陳設して、備ふる所なり。

とある。願文にあるように家光の「武運長久」や「吉祥如意」、あるいは国の安泰や五穀豊饒にあったとしても、どこにどのように納めようとして、この刊行が始まったのかは分からない。製本の時期をみると、『徳川実紀』に慶安元年4月、家康の33回忌の法要に天海版一切経が奉納されたことを記している。また東西両本願寺や青蓮院にも翌年までには納められているが、京都山科本願寺は完成から35～39年後の貞享から天和年間にかけて製本されたことが、わかっている。

天海版には刊記とともに願文が摺印されている。総数302件あり、天海が亡くなる寛永20年(1643)までの刊記は7年間で僅か29件であったが、翌年から5年間で273件と完成を急いだことがわかる。

願文のうち最初のもは、仏の教えではなく、六派哲学のサーンキヤ学派の学説が書かれている『金七十論』であって寛永14年12月17日の日付である。そこには、

図版-2

奉再興 佛説一切經藏
 今上皇帝 玉體安穩
 東照權現 倍增威光
 征夷大將軍左大臣源家光公武運長久
 四海泰平 國家豐饒
 佛法紹隆 利益無窮
 日本武州江戸東叡山
 山門三院執行探題前毘沙門堂門跡
 大僧正天海願主
 寛永十四年丁丑曆十二月十七日
 林氏幸宿花溪居士栞行

とある。このなかで重要と思われる三点を指摘することができる。

第1点は、第1行目の「奉再興 佛説一切經藏」という文言である。再興というからには初興を意識している訳であって、宗存版を念頭においての文言であろう。なお、この「再興」とするのは全164件で正保3年4月6日までの願文で、以後は「奉彫造 佛説一切經藏」である。

日本近世の大蔵経出版について



三 黄檗版の出版と流布

日本で最初の流布版の大蔵経を完成させたのは黄檗僧の鉄眼(1630—1682)であった。彼は日本に流布している大蔵経のないことを嘆き、その出版を思い立ち、宗祖隠元から明の万曆版をもらい受けた。寛文11年(1671)より刻蔵がはじまり天和元年(1682)一応の完成をみる。

全蔵ではないが延宝6年(1678)製本がおわった黄檗版大蔵経が後水尾上皇に献上され、さらにそれは日野正明寺に下賜された。その版木は重要文化財として昭和32年(1957)2月、48,275枚が指定されている。

版木による出版は一枚の板に活字を刻んだもので、黄檗版は大概をいえば、約横82cm、縦21cm、厚さ1、8～2cmの節のない桜材の板に片面2面、表裏合せて4面分が刻んである。1面は1行20字、20行で中央の部分は版心といって、上から三蔵などの分類、典籍名、巻数、丁数、千字文巻次などが刻まれている。このことは、方冊本に綴じられているから、版心により直に読みたい経典の箇所を探し出すことができるので、従来の折本や卷子本、あるいは粘葉装本などとは比べものにならない位、読む人にとっては便利な装幀であった。それは底本である明の万曆版そのままを踏襲したもので、整版で方冊本ということは、はじめから多くの人々に大蔵経を読んでもらうために便利なものを鉄眼は考えてのことと思われる。目録でいえば明万曆版正蔵の覆刻のみをもって黄檗版というが、それだけではない。完成を急ぐためか、安価にするためか和刻本を入れ版したり、万曆版正蔵には入蔵されていないものを出版したりしていることがわかってきた。いま一つ特筆すべきは『高麗版』を底本とした出版のあったことである。

これは、真言宗新安流の祖であり、梵学を

この日 勅使五條少納言為庸日光山天海の墓に参向して、慈眼大師の追号給はりし勅書をよむ。これは傳教、弘法、慈覚、智証の後は、七百余年其ためしなき事なれども、今この大師は、神祖こと更御帰依たるをもて、勅許せられしとの趣なりき。

しかし天海版一切経の慶安元年3月10日と17日の両日の願文(4件全部)には既に慈眼大師号が使われている。すると、すでに約1箇月前には決定していたことがわかる。

復興した僧としても名高い浄厳寛彦(1639—1702)が鉄眼に出版依頼したものであった。『浄厳大和尚行状記』の延宝2年(1674)の条に、

此時二当于黄檗山鉄眼道光禪師大二化門ヲ開キ、大蔵経ヲ梓行シテ黄檗山宝蔵院ニ納ム。吾師、信ヲ通ジテ其道投合ス。蔵中ノ秘密経軌ヲ別ニ目録ヲ出シ、蔵中ノ欠本十余巻ヲ加ヘ居シメ、諸人ニ求メシムルカ故ニ、天下ニ諸儀軌ヲ持スル者六百余人ナリ。

とあって、二人の親交を記している。浄厳は真言宗の基本となる儀軌に関する『仏説秘密儀軌衆法経総目』という目録をつくり、その普及をはかった。そこで刊行されつつある『黄檗版』によって儀軌典籍を揃えようとしたが、そこに入蔵もされておらず、和刻本にもない典籍を鉄眼に頼んで新しく開版してもらっている。

この目録は『大日本仏教全書』95巻159頁に翻刻がある。浄厳の要請であるから、高野山の『高麗版』を使用した可能性が高いと思われる。いまその目録に挙がっているもののうち、巻末に、

高麗国大蔵都監奉 勅雕造という記載のあるものをあげると、

図版-3

金剛頂瑜伽一字頂輪王一切時
 處念誦成仏 儀軌 一卷
 十地経 九巻
 大虚空蔵菩薩所問経 八巻
 修習般若波羅蜜多菩薩觀行念誦儀軌 一卷
 觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門 一卷
 大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴王経 三巻

*図版は8～9ページで紹介しています。

の6部23巻である。

また、高麗版底本では、鉄眼初刷りの後水尾天皇に献上したもののなかに「十住毘婆沙論」が含まれている。この第一巻末に「癸卯歳高麗国分司大蔵都監奉勅彫造」とあり、第17巻末に「寛文六丙午年開版」とある町版である。法然院本は万暦版の覆刻であることを考えると、鉄眼在世中に十住毘婆沙論は入れ版を改めたと考えられる。

このような底本の出入はあるが、一般に黄檗版といわれる明万暦版正蔵の分については275帙に納められ、頒布された。たいした資金も、後立てとなる協力者もなくはじめられた大蔵経の刊行は、鉄眼の情熱とそれに応えた人々の合力で完成した。これらの協力者については黄檗版大蔵経の刊記に、どこの国の、誰から、いくら寄進されたのか記されている。天和元年(1681)のことで、その年は飢饉があり、鉄眼が難民救済のための施財協力のためにしたためた手紙が残っている。

こうして出来上がった黄檗版大蔵経は大蔵経請去總牒という初期の販売台帳のような本によれば405蔵もが全国各所に納入された

という。また同じく全蔵漸請千字文朱点という宝蔵院に所蔵されている台帳によれば2,225箇所にのぼる黄檗版大蔵経の所蔵者の名前と納入時期などが記されている。それによれば、配本は一度に行われるのではなく数回に分けているのが一般的で、中には30回以上に及ぶところもあった。製本の関係もあるが、代金の支払も考慮にいれれば、当然のことといえよう。

275帙1,654部6,995巻ともいわれているが、これは明の万暦版正蔵のみの部数と巻数で、そこに入蔵されていない鉄眼が浄厳の要請によって出版した秘密儀規の一部や蔵外典籍、語録類などははいっていない。さらに重要なことは、明の万暦版正蔵に入蔵されている経典のなかにも、はじめ町版を使って摺られたものもあり、摺印時期によって変遷があることである。このことは、鉄眼版=黄檗版=明万暦版(正蔵)では決してない。したがって鉄眼が出版した大蔵経の目録さえないというのが正しい認識である。

図版-4

日本近世の大蔵経出版について



83-1759)はその貴重な所以を述べ、さらに、明治初期には清国駐日公使の楊守敬(1839-1915)が本国に貴重な典籍として紹介している。その上に民国2年(1913)には上海から出版されたという。1986年にも上海古籍出版からこの法然院蔵版本を影印出版している事によっても後世への影響の大きくなるのがわかる。その注目すべきは編纂者の一人宝洲が序に於て、

為之(音義書)校閱。然於高麗原本間亦非無字句譌脱倒置行贖等差。今概存原本不敢妄点竄。と述べ、実際に少しく直している点で頭注に明記している。『高麗版』だからといって無批判に出版した訳ではないことがわかる。

そのほか、同様の出版として、つぎのものがある

- ① 光讚経 2巻 竺法護訳
- この経典は『黄檗版』にも『高麗版』にもともに10巻本として入蔵されているが、出版の理由は『麗北両蔵相違補欠録』に、
- 此光讚経一部十巻北蔵展麗蔵前八巻而為十巻以為一部而実欠後第九第十之両巻故写其両巻而補北蔵之所欠者也
- とあるように、巻9、10の2巻を出版したものである。
- ②根本説一切有部毘奈耶葉事 18巻 義浄訳
- ③根本説一切有部毘奈耶出家事 4巻 義浄訳
- ④根本説一切有部毘奈耶安居事 1巻 義浄訳
- ⑤根本説一切有部毘奈耶隨意事 1巻 義浄訳
- ⑥根本説一切有部毘奈耶皮革事 2巻 義浄訳

ところで、このような大蔵経の校合は忍激だけではない。文政9年(1826)より天保7年(1836)まで越前浄勝寺丹山順芸は息子二人らと共に、やはり建仁寺の高麗版と黄檗版との対校事業を興し完成させている。翌年天保8年9月に建仁寺が出火し大蔵経もごく一部を残し焼失したことで、ただちに東本願寺は11月に丹山にその対校の副本を作るよう命じている。現在の大谷大学図書館所蔵の対校本はその副本である。

遡れば、写経の時代から、たえず経典は善本との対校をして受け継がれてきた。中世においては写経の功德とともに対校の功德などもあった。このような善本を重んじる伝統を近世においてもみることができる。

妙心寺では寛文年間において蔵経設備を決定し、なにを大蔵経として求めるかの撰定の議があったことを伝えている。その議にかかわった龍華院竺印は天海版には誤字或いは横倒の不都合があるといひ、最終的に建仁寺の高麗版を謄写することにした、という。美濃より特注の紙を摺らせた大蔵経である。これなども天海版のいくつかの経典を校訂した上での判断と考えられる。このとき黄檗版は事業が始められたばかりの時期であった。

おわりに

以上、近世の大蔵経を概観し、忍激を中心とした対校事業の影響をのべた。近世の仏教学及び宗学への直接の影響は流布版である黄檗版大蔵経であったといえる。さらに明治、大正と日本で大蔵経が編纂出版されているが、そこでも黄檗版大蔵経や忍激の対校事業が利用されていることを忘れてはならない。

(佛教学部 まつなが ちかひ)

注:本稿は、第6回仏教図書館協会研修会(平成13年10月11日 於佛教学部図書館)の講演に加筆したものである。

*図版は8~9ページで紹介しています。

四 近世の大蔵経の校訂

近世の大蔵経の出版は宗存・天海・鉄眼の3人でつぎの、大蔵経の刊行とくに流布版の黄檗版大蔵経の普及により全蔵にわたるテキストの校訂が行われた。そのはじめは法然院中興第2世の忍激(1645-1711)である。彼の伝記によると、刊行途中の黄檗版の『大乘本生心地観経』を読んでいたところ文意の通じない箇所が多々あった。偶々安然和尚の著した『普通授菩薩戒廣釋』に引用する経文と比較すると、果たして漏脱があった。いろいろ黄檗版大蔵経の経文を閲して意味の通じない箇所のある毎に、黄檗版大蔵経と善本とを対校して誤りを正していきたく思っていた。そこで建仁寺の高麗版大蔵経と黄檗版大蔵経との対校を決め、江戸芝増上寺より直絃を上首とする学生十余人をよびよせた、という。

その事業は高麗版と黄檗版とを比べ、朱筆で黄檗版にその相違点を記入する方式で、正確を期すために1巻について3人が校正していった。宝永3年(1706)2月19日にはじまり、足掛け5年の歳月を費やし宝永7年4月に対校事業を終えた。

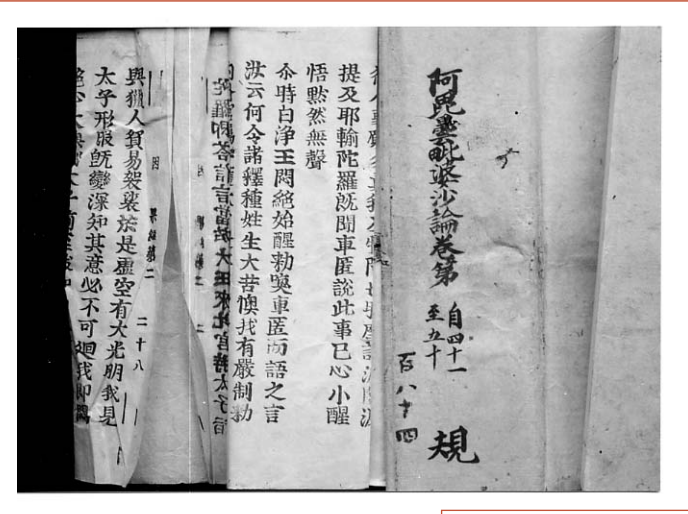
図版-5・6

忍激の事業は単に黄檗版を高麗版に対校したことによってのみ評価されるべきではない。同等に評価されるべきはその対校録の出版である。それには大分して2種類ある。

①相違した点のみを出版する校正部
②黄檗版に入蔵がなく、かつ高麗版に入蔵の典籍を出版する欠本補欠部
従来対校録は①の校正部のみであったかのように言われてきたが、②の欠本補欠部も重要である。まず、校正部は全百巻の出版予定であったが、法然院において実際に確認できたのは56巻までであるから、それ以上の出版はなかったとおもわれる。

- 般若部 三巻三冊 通巻一~三
- 宝積部 四巻四冊 通巻八~十一
- 大集部 五巻五冊 通巻十二~十六
- 華嚴部 四巻四冊 通巻十七~二十
- 涅槃部 三巻三冊 通巻二十一~二十三
- 重説経部 十二巻十二冊 通巻二十四~三十五
- 単説経部 十巻十冊 通巻三十六~四十五
- 小乗経阿含部 七巻七冊 通巻四十六~五十二
- 小乗単説経部 三巻三冊 通巻五十三~五十五
- 宋元入蔵経部 一巻一冊 通巻五十六

欠本補欠部のなか第一に挙げられるべきは慧琳撰『一切経音義』100巻(元文3年1738)と希麟撰『統一経音義』10巻(延享3年1746)の刊行であろう。また儒学者服部南郭(16

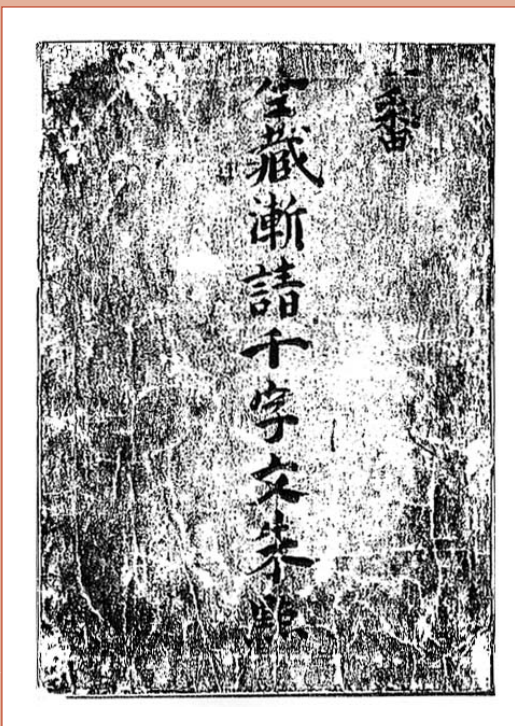


圖版-1 毘沙門堂所藏

日本近世の 大藏經出版について 〔圖版紹介〕

有義者因中有果義一義者自性一人隨多
人用迴轉意用者令我與諸塵相應後令見
中間五義者有五道理立自性有五道理立
人我如前說獨存者由正稱知定極獨存和
合及離者猶滿故和合事顯故相離入我多
者生死不同故此義如前說身住者由細身
乃至未生智此十義與五十義合是六十萬
佛所說是故七十論與六十萬義等外曰天
論與七十有何異答曰昔時聖傳及破他執
彼有此無是異義如是論義已究竟
金七十論卷下
實買上首白皮破下開學賴社及下
氣歌下息上數揭及別據伏下及
奉再興 佛說一切經藏
今上皇帝 玉體安穩
東照權現 倍增威光
征承大將軍左大臣源家光公武運長久
四海泰平 國家豐饒
佛法紹隆 利益無窮
日本武州江戸東叡山
山門三院執行探題前毘沙門堂門跡
大僧正天海願主
寬永十四丁丑曆十二月十七日
林氏幸福花溪居士乘行

圖版-2 青蓮院所藏



圖版-4 黃檗山寶藏院所藏

震本上品
三行
初分緣起品第一之一
唐三藏法師玄奘奉詔譯
般若波羅蜜多經卷第一
是我聞一時薄伽梵往王舍城鷲峯山頂與大
芻芻千二百五十人俱皆阿羅漢諸漏已盡無復煩
惱得真自在心善解脫慧善解脫如調慧馬亦如大
龍已作所作已辦所辦棄諸重擔逮得已利盡諸有
結正知解脫至心自在第一究竟除阿難陀獨居學
地得預流果大迦葉波而為上首復有五百苾芻尼
眾皆阿羅漢大勝生王而為上首復有無量鄔波索

圖版-5 法然院所藏

大集大虛空藏菩薩所問經卷第八
開復儀同三持進武鴻臚卿肅國公食邑三千戶賜紫增司空
謚大監正號大廣智大興善寺三藏沙門不空奉 詔譯
爾時會中釋梵護世見與波旬授菩提記一切皆生
奇特之心歎言希有甚高世尊彼等諸魔於佛善說
法毗奈耶而作魔事猶見如來福不唐捐皆蒙授記
當證無上正等菩提究竟涅槃世尊豈有善男子善
女人以善信心入於佛法所獲福業而得校量當知
皆是諸佛境界非餘聲聞緣覺所測
爾時佛告釋梵護世諸天人等如汝所說誠諦不虛
經 大集大虛空藏菩薩所問經卷第八 一
佛說是經已時大虛空藏菩薩摩訶薩具壽大迦葉
波且壽阿難陀娑訶世界主大梵天王釋提桓因四
大天王諸苾芻眾及大菩薩天人阿脩羅乾闥婆等
一切眾會聞佛所說皆大歡喜信受奉行
大集大虛空藏菩薩所問經卷第八
丙午歲高麗國大藏都監奉 勅雕造

圖版-3 私家藏 (矢野俊行氏摺印)

大藏對校錄卷第一
洛東獅谷金毛道人忍敬對校
後學沙門彭別錄
現本對校部
般若部之一
大般若波羅蜜多經六百卷
第一卷
三藏聖教序 前行 大般若波羅蜜多經卷第一
十一三藏有上大唐二字 天字二唐元 太宗文皇
帝製 三藏聖教序下 五包作也 四條作條 七沙作
沙
秋 九餐作 十注作 垂作 專作 六具俱升
七零作 三藏聖教記元 二唐有上高宗字
元皇帝 有迷下一字 聖記字 在春官日製 五
畫十詞作 翔作 三皇帝陛下 上三
五 置作 七威作 六奉下二字 九上 稱 御製
頭 五唐元 西明寺沙門玄奘製 行 上 非 字 間
空 五女作 以 間空 六上皇 述 頭 逐作 湯 七 詞
上 九日 作 日 三炯作 炯 既 作 胎 序 已 上
經 文 下 大般若波羅蜜多經卷第一 題號 二唐元
下 皆 奉 已 下 皆 然 三 初分緣起品第一之一 此

圖版-6 法然院所藏

近代における 大蔵経の編纂

梶浦 晋



今日、漢訳仏典を対象とした研究をする場合、一般に『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』)など明治以降に出版された大蔵経を利用することが多い。普段何気なく利用している近代になって出版された大蔵経の編纂・出版の事情は、意外に知られていない、ここに図書館より機会を与えられたので、簡単な紹介をすることとした。

そもそも仏教経典は、釈尊の入滅後数次にわたり行われた結集をへて集大成され、釈尊が説いた教法を記す〈経〉、戒律を記す〈律〉、経の注釈や解釈を記す〈論〉と呼ばれる三つの種類に大別され、あわせて〈三蔵〉とよばれるようになった。

インドでおこった仏教は、やがて四方に伝播し、中国へは二世期後半には本格的に伝来し、経典の翻訳が行われるようになっていた。インドや西域諸国から僧が中国に渡来し、或る者は記憶をもとに、或る者は貝葉に記された梵本をもとに多くの経典を中国文(漢文)に翻訳したのであった。安世高や鳩摩羅什等は訳経に功績のあった代表的な渡来僧である。また中国からインドへ求法の旅に出る僧もあり、彼等の手によっても多くの経典がもたらされた。法顕や玄奘、義浄はよく知られる求法僧である。彼等によって漢訳された多くの経典は経・律・論の三蔵に分類され一定の組織をもった叢書としてまとめられ、〈一切経〉〈大蔵経〉などと呼ばれるようになり、南北朝時代から隋唐時代には盛んに書写され、周辺諸国にももたらされ、漢訳経典を共有する仏教文化圏を形成していった。

はじめ書写の形態で流布していた仏教典籍は、木板印刷技術の発展にともない、単独の経典が印刷されるようになったが、やがて北宋初期に木板による最初の大蔵経(北宋勅版・開宝蔵)が刊行されてから、中国では多くの大蔵経が刊刻・印刷された。また朝鮮半島では高麗時代に二度も大蔵経が刊行されたほか、章疏類を多数おさめた〈統蔵〉と呼ばれる叢書も刊行された。二度目の大蔵経(再雕本大蔵経)の板木は、今日も韓国海印寺に伝えられている。日本においては大蔵経はもっぱら書写によっており、大蔵経全部が刊行されたのは、江戸時代前期になってからである。江戸時代に刊行された大蔵経で全部が完結しているものは天海版と黄檗版の二種のみである。黄檗版の板木は今も宇治の万福寺に伝えられている。

江戸時代末期から明治初期にかけて、西洋の近代的な金属活字印刷の技術が伝来すると、さまざまな典籍が活字を以て印刷発行されるようになり、大蔵経もまた、活字印刷に付されるようになった。明治以降も黄檗版は印刷しつづけられたが、新たに金属活字で刊行された三種の大蔵経がもっぱら利用されることとなった。また中国や韓国でも活字印刷や写真製版技術を用いた大蔵経の出版が行われている。以下、これらの大蔵経の刊行過程やその内容について簡単に記すこととする。

一 大日本校訂大蔵経(縮蔵)

日本で最初に金属活字を使用した漢訳大蔵経は、『大日本校訂大蔵経』である。この大蔵経は、小型の五号活字を用いたもので、活字・書物ともに小さいことによって、『縮刷大蔵経』(縮蔵)と呼ばれている。明治14年から18年まで(1881~85)、四年の歳月をかけて、菊判線装本(袋綴装)419冊(40帙)が刊行され

た。

『縮蔵』出版事業の中心人物は、もと天台宗本山派修験道大先達であり、明治維新のち教部省や内務省社寺局などにいた島田蕃根と、増上寺の福田行誠であった。二人は廃仏毀釈で疲弊した仏教再興を願い、人々が容易に大蔵経を閲読できるように、近代的活字

印刷による大蔵経の出版事業を思い立った。島田は福田に増上寺所蔵の大蔵経を底本および校本として使用することををはかり同意を得、弘教書院を興し事業をはじめた。印刷出版の指揮にあたったのはアメリカで印刷技術を学んできた色川誠一であった。弘教書院はこの大規模な事業の経済的困難を解消するために、当時としては珍しい予約出版の形式で刊行計画をたてた。一部120円・1000部出版の予定で予約を募り、仏教各宗派に協力を要請した。このころ各宗派の本山や宗務所の多くは京都にあり、色川が京都へ赴き協力を要請したが、はじめはあまりおもわしくなかったが、東西本願寺が各々500部づつを引受けたのを契機に、事業は軌道に乗ったといわれている。最終的には160円・2500部という大規模な出版となった。ちなみに西本願寺では明治19年度の決算に、蔵経代として59,480円61銭9厘を計上しており、これとは別に紙型版費として明治16年度から18年度にいたるまで合計55,837円7銭を支出し事業を支援している。

経済的な支援のみならず、編集校正の人材も、当然のことながら多くは仏教各宗派の関係者であった。校正者ははじめ次にあげるような広告を雑誌・新聞などに出したが人を得ず、後には各宗派から人材選抜し任命することとなった。この校正に従事して後に名をなした仏教学者も多い。

○一切経対校者募集広告

本院縮刷一切経対校者今般増員致し候に付、有志の僧衆は至急御照会有之度候也
但し護法篤志者にして、容易に無点の仏典を讀得る者に限るべし、
東京芝公園地第三号 弘教書院

校正の方法は、はじめに高麗蔵を底本に原稿をおこし句読点を切り、その原稿を一人が大声で読み、傍らの3人が各々宋版・元版・黄

檗蔵を見て異同のある箇所出声を出し指摘し、その由を即座に原稿に記載するという手順であったという。

島田は晩年『縮蔵』出版の動機について、江戸時代前期に京都獅師谷法然院の忍激が黄檗蔵の誤謬を建仁寺所蔵の高麗蔵で対校した事蹟に感動したことや、明治維新以後キリスト教徒が手ごろな大きさのバイブルを布教に利用し多いに成果をあげているのを見て、仏教興隆のために携帯に便利な小型の活字版による大蔵経の出版を思い立ったと述懐している。『縮蔵』の出版は、仏教学の発展に寄与したのみならず、廃仏毀釈で活力を失いつつあった仏教界の復興の契機ともなったことは明らかで、島田の『縮蔵』出版の目的は十分に達せられたと言えよう。また、大規模な印刷出版事業の先駆としても評価されている。

『縮蔵』には近代以前の大蔵経と比較していくつかの特徴があるが、その一つに幾種類かの大蔵経を対校していることがあげられる。『縮蔵』は、その本文を増上寺所蔵の高麗再雕本を底本とし、同じく増上寺所蔵の宋思溪版・元普寧寺版および弘教書院所蔵の黄檗蔵(一般に明蔵といわれているが明蔵の代わりに黄檗蔵を用いている)を対校本として校合を行い、異同を頭注に記している。また、小型の活字を用いたため携帯にも至便でもあった。ただ小型で一段組1行45字という版組であったため閲読には不便であった。その構成は従来の大蔵経が、主として唐の中期以降、釈智昇撰『開元釈教録』の入蔵録を基準として編成されているのに対し、『縮蔵』は明の釈智旭撰『閱蔵知津』の分類配列を基礎としている。

『縮蔵』は、高麗蔵を底本とし、宋・元・明(黄檗蔵)三本大蔵経対校の結果を頭注で記すなど、その内容の斬新さとともに、小型で携帯に至便であることなどによって、各界にうけいられ、明治時代の仏教学研究の発展に大きな影響を与えるものとなった。近現代の日本における仏教学の発展はこの『縮蔵』の出版が基礎になったといっても過言ではない。『縮蔵』は、その後中国で宣統3年から民国3年(1911~14)にかけて上海の頻伽精舎で、日本撰述部を除いた部分を活字を大きくしそのまま出版したが、頭注に記された対校を省いたため学術的価値を損なっており、研究上の利用価値は低い。

二 日本校訂大蔵経(大正蔵)

『縮蔵』について刊行されたのは、明治35年から38年(1902~05)にかけて刊行されて、

た『日本校訂大蔵経』（『卍正蔵』）である。これは浄土真宗本願寺派の僧前田慧雲と中野達慧が中心となり京都の蔵経書院から出版されている。この大蔵経は京都法然院の忍激が建仁寺所蔵の高麗再雕本と対校した黄檗蔵を底本とし、四六倍判線装本347冊（36套）で、『縮蔵』より大きい四号活字を用い、二段組とし読書の便をはかるとともに、全てに句読点・返り点を附していることが特徴である。蔵経書院ではこれに引き続き明治38年から大正元年（1912）にかけて『大日本統蔵経』（『卍統蔵』）751冊（150套）を出版した。これは正蔵に収録されなかった經典、特に中国撰述の典籍を集大成することを企図したもので、章疏類や禅籍などを多数収録しており、中国仏教を研究するうえで貴重な典籍が豊富にあることで知られ、後に編纂された『大正蔵』に収録されていないものも多い。『卍正蔵』が今日ほとんど利用されないのに対し、『卍統蔵』は今日でもその利用価値を失っておらず、この『卍統蔵』が蔵経書院の事業を不朽のものとしている。ただ正蔵・統蔵とも校訂については必ずしも正確ではないと言われている。

近年『新纂大日本統蔵経』として再版されるに際し、旧版出版時に欠巻であった部分について、若干のものについてその後発見された資料で補充するなど少しではあるが改訂が施されている。因に『卍統蔵』は日露戦争戦没者の追悼を祈念したものである。

蔵経書院はその後中野が主体となり、『真宗全書』『日本大蔵経』などの大型の出版を陸続と行い、大正年間における仏教出版界の隆盛に大いに貢献した。蔵経書院の蔵書の多くは今日京都大学附属図書館に〈蔵経書院文庫・日蔵既刊分・日蔵未刊分〉として所蔵されており、出版に際しての努力の様子をうかがい知ることができる。また『卍統蔵』出版に際しては多くの宗派や寺院のほか諸大学の図書館などから底本の提供があり、出版事業の経過や底本の提供などの情報の一部は、同書院発行の『大蔵経報』に記されている。この『卍統蔵』もまた中国において民国9年（1920）に上海商務印書館から覆刻されている。

近代における大蔵経の編纂



で刊行する。このため従来線装本の形態で出版されてきた大蔵経を使用し便利な洋装本としている。（ただし線装本のものも併せて刊行された）

これらの方針は当時の学界のおかれていた状況や出版事情を考慮すれば十二分に達成されたといえよう。『大正蔵』は刊行以来、日本のみならず広く世界各地で用いられ、昭和35年（1960）に再版がだされ、近年には装訂を簡易にした普及版も出版されている。再版に際して、誤植など一部の箇所が貼込で訂正が施されているが、訂正箇所が明示されておらず利用に際しては注意を要する。

内容の特色としては、新しい分類の採用があげられる。従来大蔵経が『開元釈教録』や『闍蔵知津』など伝統的な仏教観に基づいた分類配列をおこなってきたのに対し、『大正蔵』では大乘・小乗の区別をとらず、阿含部を首に置くなど近代仏教学の成果を基礎とし、また宋・元・明版大蔵経等との詳細な対校を脚注で示すとともに、サンスクリットやパーリの名称のほか、底本や対校本の情報、品題や調巻の異同等を記した「勘同目録」を『昭和法寶総目録』におさめたことなどは、仏教研究に有用なものとして今日も重要視されている。また二十世紀初頭に敦煌で発見された多数の古写本などを利用した「古逸部」の存在も大きな特徴である。

ただ、活字印刷の常として誤植が多々見られることや、底本や校本の移録に際しての誤記による間違いや、木版や写本にある異体字の処理等に問題点があるといわれている。

『大正蔵』の出版は高楠・渡辺の二人がその中心人物であったことは言をまたないが、いまひとり大きく寄与した人物が小野玄妙である。小野は編輯部の責任者の一人として終始『大正蔵』の編輯にたずさわるとともに、全国の寺院の経蔵を調査し、仏教書誌に関する多くの報告書や論文を『ピタカ』や『仏典研究』などに発表している。彼の業績は個々にみると今日では訂正すべき部分も多いが、未だその価値を失ってはいないものも少なくない。『仏書解説大辞典』の別巻として出版された『仏教經典総説』は漢訳大蔵経の組織や変遷を考察した先駆的著作である。

この『大正蔵』については、底本の選定が適切でない、誤読・誤植が多い、編纂以後に確認された新出資料に基づく改訂や増補の必要性等に関して、批判もみうけられる。今日の学問のレベルや出版事情から、『大正蔵』の不備を指摘することは容易であるが、種々の困難な条件のもと出版を完結させたことを思うと、『大正蔵』を、完成より数十年をへても改訂もせず、新たな大蔵経の編纂も行つてこなかった後の人々の責任のほうがより重大な問題と思われる。

明治以来、漢訳大蔵経として『縮蔵』『卍蔵経』『大正蔵』の三種が刊行されたことはすでに記したが、これら以外にも仏教関係の典籍を収めた叢書が相次いで出版されている。主要なものとしては、『大日本仏教全書』『日本大蔵経』『仏教大系』のほか『真宗全書』『浄土宗全書』など各宗派ごとの全書類が多数ある。また『国訳大蔵経』や『国訳一切経』など漢訳經典の日本語訳を目指すものも編纂されたが、その多くは漢文を読み下し文にする段階のものかほとんどであった。

このほか明治以降の仏教の特色として漢訳以外の大蔵経の出版がある。明治以前においては、日本人にとって仏教典籍といえば、ごく少量の悉曇文献を除いて一般には漢訳經典以外には無かったのであるが、明治以降、南アジアや東南アジア諸国、或いは西藏（チベット）の言語で記された仏教典籍の研究にも関心がよせられ、これらの言語によって記された仏教典籍も多数もたらされた。その代表的なものとして西藏語の大蔵経がある。今日、東洋文庫、東北大学、大谷大学、高野山大学などに多数のチベット仏教典籍が収蔵されている。これらを研究資料として影印出版することは、早くより望まれたのであるが、昭和33年に完成した大谷大学所蔵の北京版大蔵経を用いた影印本が大規模な出版のはじめである。今日ではデルゲ版など諸版のチベット大蔵経が影印本で或いはマイクロフィルムで利用できるようになっている。

またパーリ語の仏教典籍は南アジアや東南アジア諸国で伝えられてきたが、これらを日本語訳したものが『南伝大蔵経』である。

三 大正新脩大蔵経（大正蔵）

明治時代のはじめに真宗大谷派の僧の南条文雄・笠原研寿の二人が英国へ留学しマックス・ミュラーのもと西洋の仏教学を学んだことが、日本人による近代仏教学研究のはじまりであった。その後、高楠順治郎等がつづいて海外へ留学し、明治末年には諸大学において西洋流の近代仏教学の研究環境が整ってきた。このような環境のなか大正時代になり、新たな大蔵経の出版がはじめられた。高楠順次郎・渡辺海旭を都監として編纂された『大正新脩大蔵経』である。

この大蔵経は大正12年（1923）に「刊行趣旨」が公表され、翌13年5月より毎月1冊づつ刊行され、昭和3年（1928）には正編55冊が完結した。当初の計画では各冊1,000頁前後・全55巻の予定であったが、のち統編30巻・図像部12巻・『昭和法寶総目録』3巻を増加し、昭和9年（1934）に全100巻が完結した。『大正蔵』は『縮蔵』と同じく、本文は増上寺所蔵の高麗版大蔵経に拠り、同寺所蔵の宋・元・明版の三種の大蔵経のほか、宮内省図書寮所蔵の東禅寺版・開元寺版大蔵経や、正倉院聖語蔵（元来は東大寺尊勝院の蔵書であった）の天平古写経など多くの校本を用いて編纂されたもので、今日でもその学術的価値を保っている。正編完成時に記された刊行経過要

略によると、『大正蔵』出版は大正11年（1922）に東京帝大梵文学研究室において高楠を中心とする集まりがあり、大蔵経の出版について議論があったことに端を発したとしている。当時『縮蔵』は1部1,000円以上もし、かつそれも入手が困難であったという。また高楠は前年石山寺で古写経の調査を行ってより、通行の大蔵経と古写経の対校の必要を感じており、それが新たな大蔵経を出版する大きな動機となったのであった。

高楠・渡辺は刊行に際し五大特色として以下のような方針を掲げた。

第一は厳密博渉の校訂につとめるため、日本国内の古写経はもとより、敦煌など中央アジアで新たに発見された中国の古写経までもその資料として用い校訂を行う。

第二は周到清新な編纂をするため、従来の大蔵経の編成にとらわれず新たな学問の成果を利用し系統だった組織をつくりだす。

第三は梵漢対校を行い、最新の研究成果を総合しサンスクリットやパーリ經典を参考に校訂を行う。

第四は經典の内容索引・大蔵経諸刊本の対照表・内外現存の梵本や古写本目録を作成し研究の資とする。

第五は携帯の便を考慮しかつ低廉な価格

四 日本以外での漢訳大蔵経出版

以上、近代における日本の漢訳大蔵経の出版の概要をみてきたが、日本と同様に漢訳仏典を利用している中国などの地域では、近代に於いてどのような出版が行われてきたの

であろうか。まず中国においては近代以前においては木版による大蔵経出版が盛んであった。近現代の中国では、活字印刷と写真製版技術を用い

たいわゆる〈影印本〉による出版が盛んに行われている。特に活字本より、金版、宋版など清朝以前に刊刻された古版の大蔵經の影印本が多いことが大きな特徴である。

また、1945年以降、日本では新たな漢訳大蔵經の編纂が本格的には行われていないのに対し、近年相継いで出版されていることも注目される。

台湾においても、古版の大蔵經の影印が主流である。民国63年(1974)に刊行が開始された修訂中華大蔵經は、磧砂版大蔵經を影印し、磧砂版に収められていない經典等は明嘉興蔵の影印で、また上記二種の大蔵經に収められていないものは、別の版本を影印で収めるといふ方針で大量の仏教典籍の影印出版

が行なわれている。

一方、韓国においては、もっぱら高麗再雕本大蔵經の木版印刷、もしくはその影印が主流である。海印寺の板木を用いて新たに印刷することは、朝鮮総督府時代や1945年以降、数度行なわれている。これらのうち数部は日本へもたらされている。45年以降は影印が主流であるが、影印本では、木版では不鮮明な箇所が、手写や金属活字で部分的に補われている。

影印本は、写真製版によって古写や古版を原本の様子をそのまま伝えようとするものであるが、不鮮明な箇所に修正を加えたり、別版で差し替えたりすることがあり、利用に際しては十分に注意する必要がある。

近代における大蔵經の編纂



五 大蔵經研究とこれからの大蔵經

次に、近代における大蔵經の研究や調査活動について概観することとする。

近代における大蔵經研究の先駆的業績としては、浄土宗の僧養鷗徹定の『古経題跋』『古経搜索録』『訳場列位』があげられる。徹定は、江戸時代末から明治初期の廃仏毀釈で、多数の經典が市中に流出していた時、それらを収集し、あるいは諸寺を訪れ經典の奥書や刊記などを収集し、先にあげたような書物を著した。徹定収集の古写経や古版経の多くは今日、知恩院に蔵されており、国宝や重要文化財など国の指定をうけているものもある。

南条文雄は明治初期に英国に留学し、『A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka, the sacred canon of the Buddhist in China and Japan, Oxford, 1883』を著したが、留学以前に修めていた伝統的な仏教学と、留学によって学んだ西洋の仏教学とをあわせ修めた成果である。

本格的に大蔵經に関する調査や研究が行われるようになったのは、『正統蔵』や『大正蔵』が編纂される明治末年から大正時代からであった。古写経や古版経の調査は明治時代から行われていたが、『大正蔵』編纂時に小野玄妙を中心として各地の古寺社所蔵の典籍が調査された。残念ながらその成果は小野の論文でごく一部が公表されているにすぎない。

またこれとは別に東京ではじめられた〈大蔵会〉と呼ばれる行事は、仏教典籍に対する関心を高めるものとして重要な役割をはたした。東京につづき京都・名古屋・三河などでも同様の〈大蔵会〉が執り行われ、〈京都大蔵会〉は今日も継続して開催されている。〈大蔵会〉

は經典の書写・刊行に功績のあった人々の顕彰とともに、新たな大蔵經編纂の為の資料蒐集をも目的とするものであった。〈大蔵会〉の展覧目録は、仏教典籍の研究に多くの情報を提供するものとして貴重なものである。大蔵經に関する研究は、『大正蔵』編纂時には比較的多かったのであるが、『大正蔵』完成以後、少なくなっていく。

戦後、文化財保護政策の一環として、寺社所蔵文献の調査が行われるようになり、各地の寺社の大蔵經や聖教類の整理・調査の報告書が刊行され、仏教文献の貴重な情報が公開されるようになった。近年、中国で古版の大蔵經の影印本が多数刊行されるなどの状況もあり、大蔵經に関する研究も増加しつつある。

近年の調査・研究で、すでに散逸して伝存しないとされていた經典が発見されたり、従来知られているものと本文に異同が多い異本の存在が判明するなど、新たな成果も生まれている。

今日、敦煌遺書や日本の古写経のほか、古版の大蔵經に関する資料は、『大正蔵』編纂時にくらべ飛躍的に増えており、新たな大蔵經を編纂する条件は整いつつあるが、未だ機が熟さないのか、あるいはその必要性がないのか、新しい大蔵經編纂の機運は今のところないようである。今後、新たな漢訳大蔵經編纂の機運が高まれば各国の特色を生かして協力してことにあたれば、より正確で学術的価値の高い大蔵經ができるであろう。

また近年、仏教典籍のデータベース化が世界各地で進められているが、その底本はほとんどが『大正蔵』である。今日では『大正蔵』

が万全な大蔵經でないことは周知のこととなっているが、データベース化に際して、この問題が充分には検討されていないのが現状であろう。種々問題があっても『大正蔵』を電子化することは、学界を益すること大なるものがあることは否定できないが、一方、『大正蔵』がもつ問題点を改善せずにそのまま電子化することは学術の発展のために十全なありよ

注:本稿は、第6回仏教図書館協会研修会(平成13年10月11日於佛教学大学図書館)の講演に加筆したものである。

参考 近代編纂主要大蔵經一覽

- 【日 本】
 - ◎大日本校訂大蔵經(縮蔵)【活字】
 - 底 本 高麗・再雕本大蔵經 [増上寺所蔵本]
 - 対校本 宋・思溪版大蔵經 [増上寺所蔵本]
 - 元・普寧寺版大蔵經 [増上寺所蔵本]
 - 黄檗版大蔵經 [弘教書院所蔵本]
 - (一般に明蔵と言われている)
 - 特 徴 最初の金属活字(五号活字)による大蔵經『開蔵知津』の分類を基礎とした配列
 - 宋・元・明三本による対校を頭注で示す
 - 活字を小さくしたことにより携帯に至便であるが、閲読に不便
 - ◎日本校訂大蔵經(正蔵)【活字】
 - 底 本 黄檗蔵[法然院所蔵・麗蔵対校黄檗版大蔵經]
 - 特 徴 縮蔵が五号活字であるのに対し、四号活字二段組で訓点を附す
 - 校訂を頭注で示す
 - 訓点を附すが、まま誤りがみられるという
 - ◎大日本統蔵經(正統蔵)【活字】
 - 底 本 諸種刊本・写本
 - 特 徴 従来の大蔵經に入蔵されていない仏教典籍を収録
 - 〈正蔵〉同様訓点を附す
 - 校訂を頭注で記す
 - 底本の出自があきらかでないものがある
 - 原稿となった本は一括して保存(京都大学附属図書館)
 - ◎大正新脩大蔵經【活字】
 - 底 本 高麗・再雕本大蔵經 [増上寺所蔵本]
 - 対校本 宋・思溪版大蔵經 [増上寺所蔵本]
 - 元・普寧寺版大蔵經 [増上寺所蔵本]
 - 明・嘉興大蔵經 [増上寺通元院所蔵本](黄檗蔵か?)
 - 宋・福州東禅寺・開元寺版大蔵經 [宮内省図書寮所蔵本]
 - 高麗・再雕本大蔵經 [金剛峯寺所蔵本]
 - 聖語蔵古写本
 - その他諸種刊本・写本
 - 特 徴 配列を独自のものにする(大小乗の区別をなくす等)
 - 諸本の校異を脚注で記す
 - 敦煌遺書などの古逸經典や偽疑經典等を収録
 - 図像部を附す
 - 洋装本で最初に完結した大蔵經

- 【中 國】
 - ◎頻伽精舍校刊大蔵經【活字】
 - 底 本 大日本校訂大蔵經
 - 特 徴 縮蔵の翻刻(宋元明三本の対校を省き、日本撰述典籍を未収録)
 - ◎影印宋磧砂版大蔵經【影印】
 - 底 本 宋・磧砂版大蔵經[西安臥龍寺開元寺藏宋元刊本、欠巻部分は他の大蔵經で補う]
 - 特 徴 古版大蔵經の本格的影印出版
 - ◎影印宋蔵遺珍【影印】
 - 底 本 金・解州天寧寺版大蔵經[山西趙城廣勝寺所蔵金版大蔵經]
 - 特 徴 従来の大蔵經未収の典籍を収録
 - ◎脩訂中華大蔵經【影印】
 - 底 本 第一輯 影印宋磧砂版大蔵經
 - 第二輯 明・嘉興大蔵經
 - 第三輯 大日本統蔵經
 - 特 徴 諸種の大蔵經を集成し影印した大蔵經
 - 明・嘉興蔵の一部が影印される
 - ◎中華大蔵經〈漢文部分〉【影印】
 - 底 本 金・解州天寧寺版大蔵經[北京図書館・北京民族文化宮等所蔵本]
 - 対校本 房山石經
 - 宋・思溪版大蔵經
 - 元・磧砂版大蔵經
 - 元・普寧寺版大蔵經
 - 明・永樂南蔵
 - 明・嘉興蔵
 - 清・龍蔵
 - 高麗・再雕本大蔵經
 - 特 徴 現存の金版大蔵經大部分を影印
 - 対校に8種の版本を用いる
 - 収録經典数が多い(4200余種23000余巻)
 - ◎〈房山石經〉【影印】
 - 底 本 北京房山雲居寺石經
 - 特 徴 房山石經全ての拓本を影印
 - 房山石經を通じ契丹版大蔵經の状況を知ることができる
- 【韓 國】
 - ◎高麗再雕本大蔵經【影印】
 - 底 本 海印寺所蔵高麗再雕本大蔵經

近代編纂大蔵経関連略年表

日 本 中 国 ・ 朝 鮮 半 島

日本における主要な大蔵経研究・調査・目録・関連事業等

大日本校訂大蔵経(縮蔵)(一八八〇～八五)

日本校訂大蔵経(正蔵)(一九〇二～〇五)
大日本統蔵経(正統蔵)(一九〇五～二二)

〔博文閣〕縮刷大蔵経(未完)(一九二二～三三)

大日本仏教全書(一九二二～三三)
日本大蔵経(一九四一～三三)

国訳大蔵経(一九二七～二八)
仏教大系(一九二八～三三)

大正新脩大蔵経(一九二四～三四)

国訳切経(一九二八)
昭和新聞国訳大蔵経(一九二八～三三)

南伝大蔵経(一九三五～四二)

影印北京版西蔵大蔵経 (一九五八～六)

〔大日本仏教全書〕鈴木財団版(一九七三)
〔日本大蔵経〕鈴木財団版(一九七三～七七)

新纂大日本統蔵経 (一九八〇～八九)

〔新国訳大蔵経〕(一九九三)

高麗再雕本大蔵経〔朝鮮〕(木版刷)(一八九八)
高麗再雕本大蔵経〔朝鮮〕(木版刷)(一八九九)

頻伽精舎校刊大蔵経〔〕〔活字〕(一九二二～四)

高麗再雕本大蔵経〔朝鮮〕(木版刷)(一九二五)

影印磧砂版大蔵経〔民国〕〔影印〕(一九三三～三六)

影印宋蔵遺珍〔民国〕〔影印〕(一九三五)

龍蔵〔民国〕(木版刷)(一九三六)

高麗再雕本大蔵経〔朝鮮〕(木版刷)(一九三七)

普慧蔵〔民国〕(一九四六～?)

高麗再雕本大蔵経〔韓国〕〔影印〕(一九五七～七六)

高麗再雕本大蔵経〔韓国〕(木版刷)(一九五八～六)

ハングル大蔵経〔韓国〕(一九六五)

脩訂中華大蔵経〔台湾〕〔影印〕(一九七四)

仏教大蔵経 統蔵〔台湾〕〔影印・活字〕(一九七八～八四)

仏光大蔵経〔台湾〕(一九八三)
中華大蔵経(漢文部分)〔中国〕〔影印〕(一九八四)

文殊大蔵経〔台湾〕(一九八六)

房山石経(遼金部分)〔中国〕〔影印〕(一九八六～九三)

龍蔵〔中国〕(木版刷)(一九八九)
龍蔵〔台湾〕〔影印〕(一九九〇～九)

房山石経〔中国〕〔影印〕 (二〇〇〇)

養鶴徹定「古経題跋」「古経搜索録」「訳場列位」

大明三蔵聖教目録(訳補) 南條文雄 訳補(一八八三)

〔大蔵経雕印考〕 常盤大定 著
『哲学雑誌』第三三三号～第三三三号(一九三三～四)

『二切経の由来』 村上專精 著 (一九五)

第二回東京大蔵会(一九二五)

第三回京都大蔵会(一九二六)

〔大蔵経解説〕 光寿会 編(一九二二)

〔仏教聖典概説〕 深浦正文 著 (一九二四)

〔昭和法宝目録〕 高橋順次郎等 編(一九二九～三四)

〔大蔵経沿革〕 藤堂祐範 著 『浄土宗学講座』

〔高野山見存蔵経目録〕 水原茂栄 編(一九三二)

〔仏書解説大辞典〕 小野玄妙 編(一九三三～三六)

第二回名古屋大蔵会(一九三三)

第三回三河大蔵会(一九三四)

〔吾国現存古版大蔵経〕 朝日道雄 編 『夕刊』 第九年九号(一九四〇)

〔黄檗鐵眼版切経目録〕 黄檗鐵眼版切経印行会 編(一九五三)

〔中尊寺経蔵宋版大蔵経目録〕 中村菊之進 編(一九五三)

〔色定法師筆書写切経目録〕 竹内理三 編(一九五七)

〔高麗版切経目録〕 高野山文化財保存会 編(一九六四)

〔大蔵経 成立と変遷〕 大蔵会 編(一九六四)

〔大谷大学図書館第三和漢書分類目録(第二分冊)〕

〔尾張史料七寺切経目録〕 七寺切経保存会 編(一九六八)

〔長瀧寺宋版切経目録〕 文化財保護委員会 編(一九六七)

〔喜多院宋版切経目録〕 喜多院 編(一九六九)

〔石山寺の研究 一切経篇〕 石山寺文化財総合調査団 編(一九七八)

〔本源寺蔵宋版切経(三聖寺旧蔵)目録〕 小島惠昭等編(一九七九)

〔宋版切経目録〕 総本山長谷寺文化財等保存調査委員会 編(一九七九)

〔名取新宮寺切経調査報告書〕 東北歴史資料館 編(一九八〇)

〔北野経王堂切経目録〕 文化廳 編(一九八〇)

〔大蔵会展覧目録(複製)目録(第二回至第五十回)〕 大蔵会 編 (一九八)

〔増上寺三大蔵経目録〕 増上寺史料編纂所 編(一九八)

〔明代以降における蔵経の開雕〕 長谷部幽溪 著
『愛知学院大学論叢(般教育)』三〇三、三〇四、三〇三、二(一九八三～八四)

〔大和郡山市西方寺所蔵切経調査報告書〕 元興寺文化財研究所 編(一九八四)

〔獅合法然院所蔵麗蔵対校黄檗版大蔵経並新統入蔵経目録〕 仏教大学仏教文化研究所 編(一九八九)

〔快友寺一切経調査報告書〕 山口県教育委員会 編(一九九二)

〔大蔵経関係研究文獻目録〕 野沢佳美 編(一九九三)

〔大蔵経関係研究文獻目録補遺・追加〕 野沢佳美 編(一九九七)

〔京都妙蓮寺蔵松尾社切経調査報告書〕 中尾堯 編(一九九七)

〔神奈川県立金沢文庫保管宋版切経目録〕 神奈川県立金沢文庫 編(一九九八)

〔西大寺所蔵元版切経調査報告書〕 奈良県教育委員会 編(一九九八)

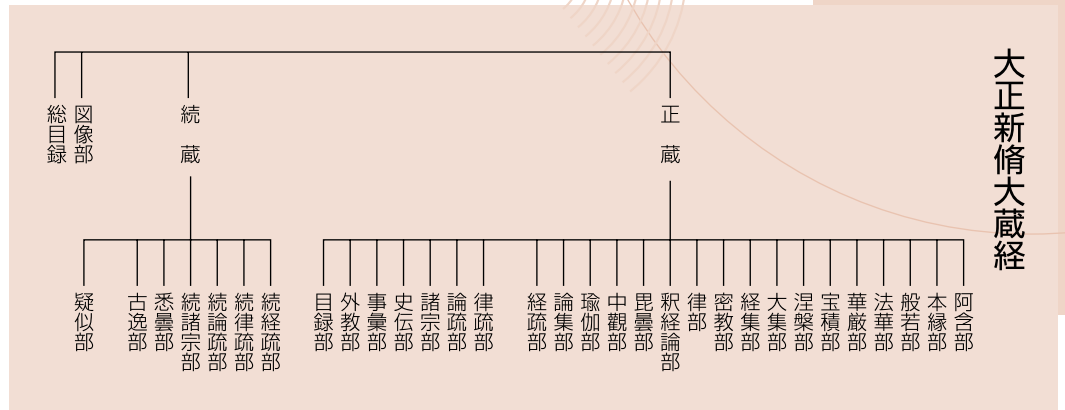
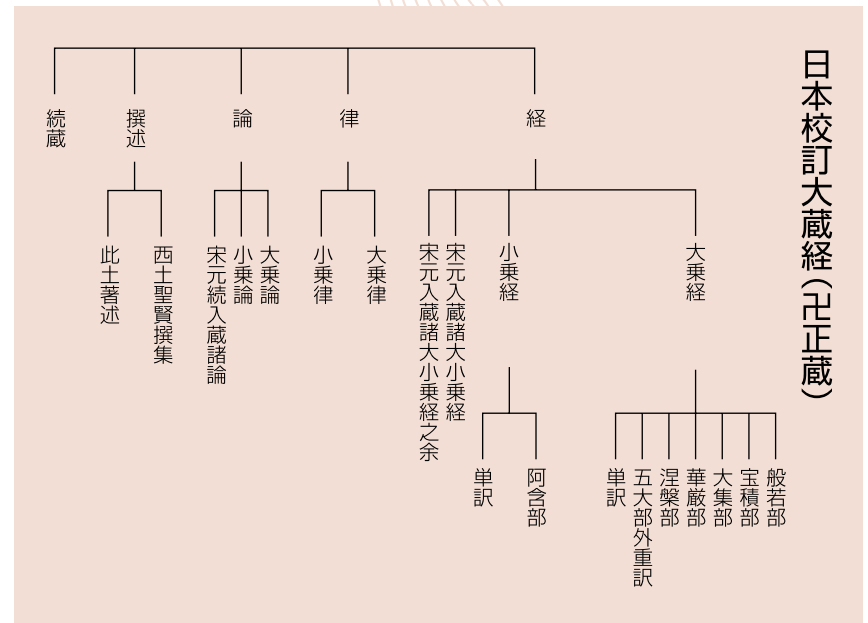
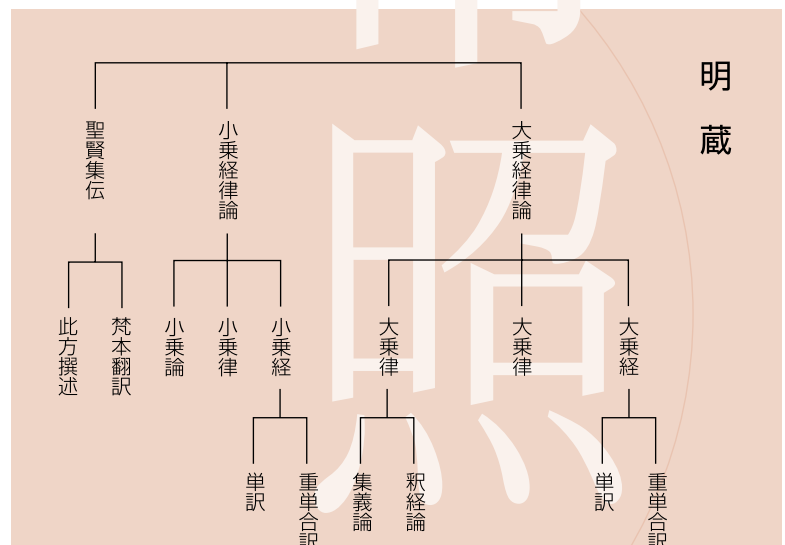
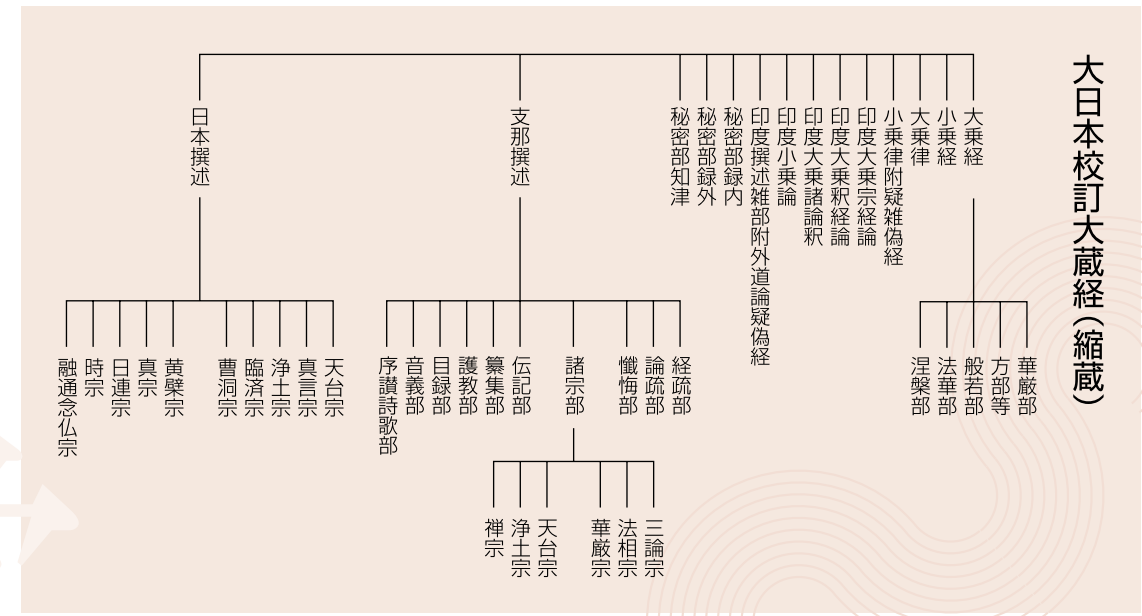
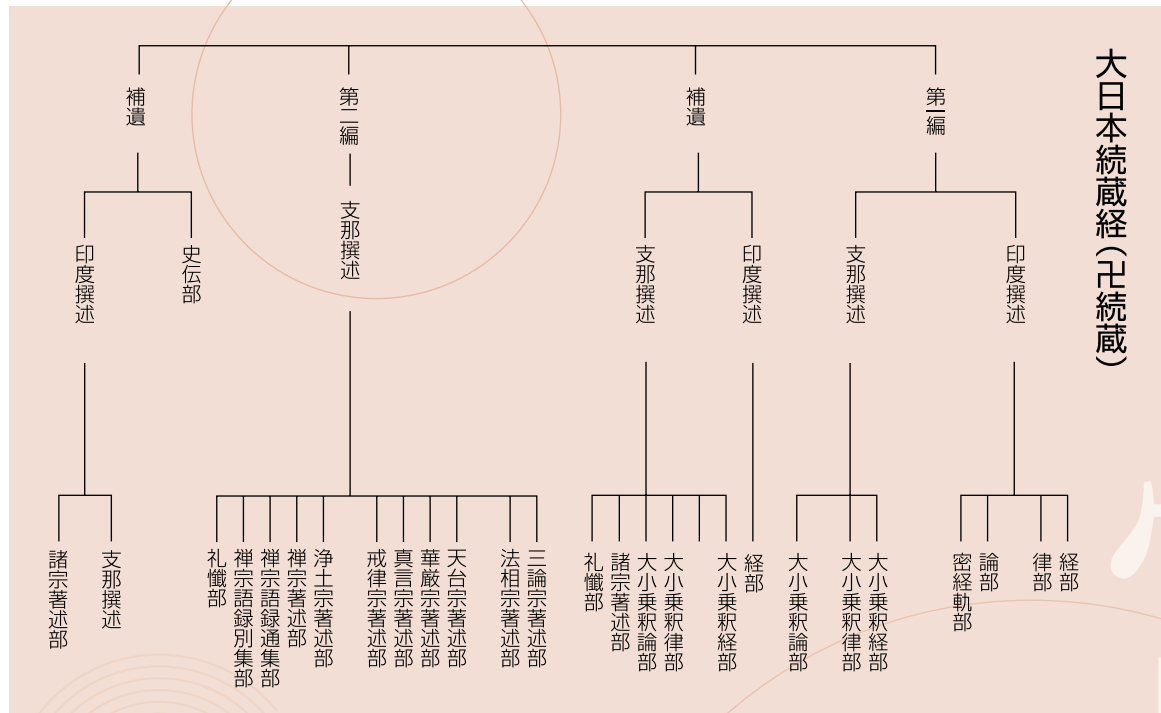
〔興聖寺切経調査報告書〕 京都府教育委員会 編(一九九八)

〔影印東叡山寛永寺天海版切経願文集〕 松永知海 編(一九九九)

〔東叡山寛永寺天海版切経目録〕 松永知海 編(一九九九)

〔延暦寺木活字関係資料調査報告書〕 滋賀県教育委員会 編(二〇〇〇)

近代における大蔵経の編纂



貸出制度が 新しく変わりました

図書館委員会では、貸出制度の見直しを行いました。見直しの大きな趣旨は、借りたい資料が貸出中で利用できない状態にあった場合に、できる限り別の利用希望者の手にわたるようにして図書回転率をあげることです。新たな貸出制度は以下のとおりです。4月より運用いたしますので、詳細は図書館にお問い合わせください。

- ① 更新(別表2参照)
- ② 予約制度(リコール)

借りたい資料が貸出中である時、予約をすることにより、その資料の返却期限に新たな返却期限を設定して、利用希望者の手にわたるようにするものです。その際、返却請求権は貸出期間が2週間以降の図書に対して発生します。返却請求を受けた場合の返却猶予期間は1週間あります。図書館は守秘義務をまもり、あくまでも貸出者の同意を得て返却請求をし新たな返却期限の設定を行います。返却された資料は総合カウンターに1週間取り置きされますが、受取がない場合、次の予約者にわたります。

- ③ リザーブ制度

教員が授業などの参考資料として、特に指定した図書を貸出禁止とし、多くの学生が利用できるようにする制度です。

受付: 随時受け付けます。排架までに約2日かかります。

排架場所: 図書館1階エレベータ近くの書架(リザーブブックコーナ)に排架します。

リザーブ期間: 教員が申し込みをし終了期間を指定します。指定がない場合は、春学期は7月末、秋学期は1月末まで設定されます。

◆佛教大学図書館利用規程細則 別表2(第11条関係) 貸出の数量および期間

	数 量	期 間	更 新 (16条関係)	予約(リコール) 可能冊数 (16条関係)
学部生、別科生、科目履修生、 短期大学生、高校生、中学生	5 冊	2週間	1	5 冊
通信教育部学部生冊	5 冊	1箇月	不可	5 冊
大学院生・専攻科生、研究員、 研究生、総合研究所研修員	20 冊	1箇月	1	5 冊
専任教職員	30 冊	3箇月	1	5 冊
非常勤講師 客員研究員・客員教授	10 冊	2箇月	1	5 冊
その他	任意指定	任意指定	不可	不可
団体貸出	必要な数量	当該年度内	不可	不可

注: 貸出期間が2週間を超える利用者については、第18条の理由により返却請求があった場合、図書館と調整の上、1週間以内に返却しなければならない。

◆同規程細則 開館日のサービス時間 別表1(第6条関係)

施 設		開 講 日 *1	夏期スクーリング 開 講 日	開 講 日
1 階	総合カウンター *2	9:00~20:00	9:00~20:00 (出納は9:00~ のみ可能)	9:00~17:00
	ブラウジングフロア			
2・3 階	開架閲覧室	9:00~20:00	8:30~20:00	9:00~17:00
	対面朗読室 1 (ヨメール)	9:00~17:00 (日・祝日は除く)	9:00~17:00 (日・祝日は除く)	9:00~16:55 (日・祝日は除く)
	対面朗読室 2	9:00~19:55	9:00~19:55	9:00~16:55
	グループ閲覧室		8:30~19:55	
	研究個室		9:00~19:55	
視聴覚コーナー		9:00~19:55		
4 階	調査カウンター	9:00~20:00	9:00~20:00	9:00~17:00
	開架閲覧室			
	地図資料閲覧室			
	マイクロ資料閲覧室			
研究個室	9:00~19:55	9:00~19:55	9:00~16:55	
地下1階	開架書庫A・B層	9:00~19:45	8:30~19:45	9:00~16:45

*1 日・祝日で大学院授業のみ実施される場合、開館時間は9:00~17:00とする。

*2 開架書庫出納業務は、カウンターのクローズ15分前に終了する。

常照

◆開催各種研修会・会議等出席参加(2001年度後期)

会議名・研修会名	実施月日	開催地	会 場	参加・出席数
私大図協西地区部会第2回役員会	10月 4日	神 戸	東急イン	2
私大図協西地区部会研究会	10月 5日	神 戸	甲南大学	3
仏教図書館協会研修会(第6回)	10月11~12日	京 都	本学・花園大学	6
Dublin Coreとメタデータに関する研修会	10月25日	東 京	国立情報学研究所	1
図書館共同事業検討委員会(第2回)	10月26日	京 都	キャンパスプラザ京都	1
私大図協京都地区主題別研究会B(業務)	10月27日	京 都	龍谷大学大宮図書館	1
大学図書館協力ニュース編集委員会(第4回)	10月30日	千 葉	千葉大学	1
図書館総合展(第2回)	11月15~17日	東 京	東京国際フォーラム	2
私大図協京都地区主題別研究会A(書誌)	11月 6日	京 都	京都産業大学	3
仏図協西地区臨時協議会	11月29日	京 都	龍谷大学大宮学舎	2
図書館共同事業検討委員会(第3回)	11月30日	京 都	キャンパスプラザ京都	1
図書館共同事業検討委員会(第4回)	12月14日	京 都	キャンパスプラザ京都	1
私大図協第2回常任幹事会	12月11日	東 京	明治大学	1
大学図書館協力ニュース編集委員会(第5回)	12月21日	京 都	本学	1
私大図協京都地区協議会第8回相互協力連絡会研修会	1月11日	京 都	本学	6
大学図書館等情報化支援会議(平成13年度)	2月19日	東 京	国立情報学研究所	1
私大図協西地区部会第3回役員会(2001年度)	3月 1日	東 京	アルカディア市ヶ谷(私学会館)	2
私大図協第2回東西合同役員会(2001年度)	3月 1日	東 京	アルカディア市ヶ谷(私学会館)	2
古文書講習会	3月5~7日	京 都	京都府立総合資料館	1
私大図協京都地区主題別研究会B(業務)	3月 8日	金 沢	金沢経済大学	2
第2回全国漢籍データベース協議会	3月 8日	東 京	国立情報学研究所	1

※私大図協・私立大学図書館協会の略。

サイト紹介

<http://www.library.pref.kyoto.jp/>

京都府立図書館

京都府全域の公共図書館の中核的機能を負う図書館としてまた図書館サービス組織網の中央図書館として活動している。その中心となるのが、府内各図書館の所蔵データを集めた京都府図書館総合目録で、200万件を越える書誌データを検索できる。

① 京都府立図書館 トップページ



② 貴重書データベース

伊勢物語など京都府立総合資料館が所蔵する貴重書の内、154件を画像データベース化し提供している。検索手段として、分類・50音・キーワード・目録番号が用意されている。



③ 府内総合目録

<http://www.library.pref.kyoto.jp/klibnet/index.html>

「京都府図書館総合目録ネットワーク」に参加している参加機関の所蔵データのオンライン検索ができる。

●調べものリンク

「新聞」、「記事検索」、「ディレクトリー・データ検索」、「法令・行政・裁判」、「統計・白書・年鑑」、「観光・生活」で京都府の地域情報がコンパクトにまとめられている。

●リンク集

国立図書館、京都府内の公共図書館等一覧、近畿圏の府県立図書館、県庁所在地市立図書館等

開館時間表

2002年度(春学期)

4月		5月		6月	
1月		1水		1土	
2火		2木		2日	
3水		3金		3月	
4木		4土		4火	
5金		5日		5水	
6土	9:00~20:00	6月		6木	
7日		7火		7金	
8月		8水		8土	
9火		9木		9日	
10水		10金		10月	
11木		11土		11火	
12金		12日		12水	
13土		13月	9:00~20:00	13木	9:00~20:00
14日		14火		14金	
15月	9:00~20:00	15水		15土	
16火		16木		16日	
17水		17金		17月	
18木		18土		18火	
19金		19日		19水	
20土		20月		20木	
21日	閉館	21火		21金	
22月		22水		22土	
23火	9:00~20:00	23木		23日	
24水		24金		24月	
25木		25土		25火	
26金	月例休館日	26日		26水	
27土		27月		27木	月例休館日
28日	9:00~20:00	28火		28金	9:00~20:00
29月		29水		29土	
30火		30木	月例休館日	30日	
		31金	9:00~20:00		

7月		8月		9月	
1月		1木		1日	
2火		2金	8:30~20:00	2月	
3水		3土		3火	9:00~17:00
4木		4日	8:30~17:00	4水	
5金		5月		5木	
6土		6火		6金	館内整理のため休館
7日		7水		7土	
8月		8木	8:30~20:00	8日	閉館
9火		9金		9月	
10水		10土		10火	館内整理のため休館
11木	9:00~20:00	11日	8:30~17:00	11水	
12金		12月		12木	
13土		13火		13金	
14日		14水	8:30~20:00	14土	9:00~17:00
15月		15木		15日	9:00~20:00
16火		16金	8:30~17:00	16月	
17水		17土		17火	9:00~17:00
18木		18日		18水	
19金		19月		19木	
20土		20火	8:30~20:00	20金	9:00~20:00
21日		21水		21土	9:00~17:00
22月		22木		22日	
23火		23金		23月	9:00~17:00
24水		24土		24火	
25木		25日	8:30~17:00	25水	9:00~20:00
26金	8:30~20:00	26月		26木	
27土		27火		27金	
28日		28水	9:00~17:00	28土	
29月		29木		29日	9:00~17:00
30火		30金		30月	閉館
31水		31土			

*変更される場合がありますのでご注意ください。